

各地で展開する地域活性化活動をサポート

(一財)北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行ってきており、助成件数は13年間で100件にのぼります。これらの活動をより効果的にサポートするために、平成20年度から助成を受けた団体の方々が活動成果等を発表、参加者が地域づくりなどについて自由な意見交換をしていただく「助成活動発表会・懇談会」を開催しています。7回目となる今年度は、平成25年度に助成を受けた団体を対象として、7月11日に札幌市内で開催しました。以下はその概要です。

持続可能な暮らしと地域づくり

活動名：余市エコカレッジの立ち上げ



坂本 純科 氏
NPO法人 北海道エコ
ビレッジ推進プロジェクト

私はヨーロッパで見たたり体験したエコビレッジのエッセンスを北海道再生のヒントにしたいと思い、最初は通年の週末だけの固定メンバーの塾を長沼で始めました。2012年に余市町の登町に約6haの半分農地という果樹園を借りることができて、「エコカレッジ構想」を描きました。13年には長沼町で実施したような学びの場をより幅広いターゲット向けにいろいろな形で提供したい、地域の資源やネットワークを活かし、地域単位でエコアップし、ビジネスにもつながっていくものにしたいと思って「エコカレッジ」を始めました。

目指しているものは、持続可能な暮らしと地域づくりです。地域の資源や地域の先生、地域の教室をどんどんつないで、地域活性化にもつなげたいし、来られる人たちと相互に支え合う環境をつくることで、地域の農業や観光業を支援できるようになりたい。その実

現のために、滞在型、継続型のいろいろなプログラムを開発しています。また、農業の問題を農業の範囲だけで解決するのではなくて、いろいろな異分野のネットワークをつくって取り組んでいけたらと思っています。

試みのひとつ目として、去年はフットパス体験ツアーを5回開催しました。敷地周辺に果樹園が広がっていますが、近隣の農家さんたちに協力してもらい、そこを歩きながらちょっとした農作業の手伝いをしたり、農家の奥さんが片手間に家族のために作っている加工品なども含め、ミニマーケットを毎回開催しました。それがきっかけで「余市まち育ての会」を開催するようになり、試行実践を継続しています。

二つ目に、学生のワークキャンプを実施しました。ワークキャンプは、私たちの暮らしや労働をそのままシェアして、途中途中でチームビルディング^{*1}や地域の人との交流をプログラム化したものです。

三つ目に、スイーツコンテストを開催しました。せっかく余市町、仁木町にはたくさん果樹があるのに知られていないし、ここでないと食べられないというお菓子が無いのはとても残念ということで、レシピを募集、一般の方々に集まってもらい、プレゼンテーションの後に試食をして投票するというものです。参加作品は25作品と少なかったのですが、プロの部とアマの部それぞれに受賞者が出て、アマチュアの方もそれがきっかけで地元の喫茶店やレストランで販売しています。

今年度は、去年のいろいろな試行をステップアップさ



フットパス体験ツアー

^{*}1 チームビルディング (team building)

同じチームのゴールを目指し、複数のメンバーが個々の能力を最大限に発揮しつづつ丸となって進んでいく、そうした効果的な組織づくりやチームをまとめる手法。

せて、フットパスルートも幾つかエリアを広げて拡大しています。私たちはブドウを作っていますが、ブドウを栽培、歴史や生態を学ぶことから、ワインとして仕込むところまで体験するような連続講座を開催しています。スイーツコンテストも、今年は余市、仁木の両町共催で、地元の観光協会、農協、商工会などにも協力をしてもらい、実施することになりました。できるだけ販売も視野に入れて、秋にまちのイベント会場である程度の個数を販売できるようにということを募集のターゲットにしています。

今回の助成でエコカレッジの試行実践ができ、ステップアップもして、今年はプレ開講に至りました。

交流活動をとおして地域活性化をはかる

活動名：地域は元気!! 私達の交流活動から



小川 文夫 氏
浜頓別町とよかんべつ
交流大学

農村地帯の小学校は、地域活性化の源、地域住民のコミュニティの場だといわれています。しかし、私どもの地域の小学校は3年前に閉校になりました。そこで、地域のコミュニティ、地域の活性化をどうしようか、閉校になった学校をどう活かしていくかというのが私どもの取り組みでした。1年間の準備期間を経て、平成23年4月に「とよかんべつ交流大学」を設立しました。活動の狙いは、都市と農村の交流によって、地域住民のコミュニティも生まれ、新しく農業を始めようとする人を招き入れ、農村青年の婚活などに結びつくきっかけになるといったことです。特に目指したのは、地域全体で取り組み、行政に頼らない住民主体の活動をしていこうということでした。また、閉校した校舎を有効に活用することに重点を置いてきました。

浜頓別町が取り組む「北オホーツク100kmマラソン」では、ボランティア活動として、ランナーを応援するために、牧草ロールを積み上げ、応援メッセージを書いて応援しています。集落のPR活動にもなるということで、道路脇に子牛のほ乳体験もできる場所をつくったり、道端に酪農クイズの看板を数本立てて答

てもらおうというアイデアも取り入れました。また、ランナーに事前に申し込みしてもらい、地元住民とランナーとの「ジンギスカン交流会」を実施、バター作りやアイスクリーム作り体験にも取り組んでいただきました。

3月には「ひな祭り交流会」として、家で箱の中に眠っているひな人形を出してもらい、閉校になった体育館に並べて、町内外の方々と交流しました。まちのエレキギター・サークルや大正琴サークルにも参加してもらい、交流活動を深めています。

12月には「もう～もう～クリスマス交流会」です。牛の写真を貼ったり、牛の人形を置いて、まちのサークルの人たちに来てもらい、生の演奏を聞いて交流を深め合う活動です。

一昨年に開催した「知ってよ酪農!!子牛一頭争奪杯ミニソフトバレー大会」は、町内から数チームが参加、優勝チームには風船の子牛1頭をプレゼントするという取り組みで、地域の活性化に一役買っています。

それから、空いた教員住宅を町で整備して行っている「ちょっと暮らし体験」では、集落に来た人たちとの交流会を積極的に開いています。この交流で私たち自身も都会から元気な空気をもらい、そして私たち農村の姿も知っていただくということで、非常に意義があります。

小学校閉校と同時に、私たちの集落は急速に過疎化が進みました。これは予期せぬことでした。過疎化が進み、人がいなくなって、新規就農する人や未婚の酪農青年の婚活問題は大きな課題でもあります。そんなことで悩んでいるときに、1人の若者が東京から来ました。10年前に山村留学で里親留学した方です。高校を卒業し、私どものまちで3年間酪農の勉強をし、昨年11月に就農したのです。彼はまさしく、お世話になった地域に恩返ししようということで、一生懸命地域づくりに参画しています。



牧草ロールでの応援メッセージ

この1年間やってみて、学校があったときと同じように、地域住民のコミュニティの輪が強くなってきました。そして、強くなった輪が自分たちの生産活動に大きく結びついていくということです。これからも活動を継続し、さらに行事のたびに交流する人口を増やして、新しく農業を始めようとする人や若い人にお嫁さんが来るきっかけをつくる婚活対策もやっていかなければならないという課題も残っています。

農業者と教員のコラボレーション

活動名：農村生活体験から考える教育課程創造プロジェクト

「食の絆を育む会」は、十勝管内16市町村にまたがる11の団体・協議会で構成されている広域連携のNPO法人です。それらの団体に所属する約550戸の農林漁家メンバーの方々のお宅でホームステイ、農村生活体験を提供している修学旅行のプログラムがあります。本州の高校生が修学旅行でたくさん北海道にきますが、そのプログラムの一つとして、3泊4日の修学旅行のうち1泊を農村で生活体験してもらいます。これにはさまざまなところの先進事例がたくさんあります。十勝は後発地域ですが、農業体験をするというよりは、私の親の世代、農業人口における農業者の割合が約50%で、農業・農村・農家が身近なものであった75年前をイメージさせる、家族のようなつながりを再生するというのが狙いです。

1泊2日の中で食の大切さを伝えるというだけではなく、まず身近に感じてもらい、イメージがわくようなつながりを持ってもらいたいという入り口を想定した中で、入り口だけで終わってしまったらもったいないという意識が非常に強くなりました。学校の先生たちとも連携して、自分たちにとって大事な農業・農村・農家を考える事後学習を展開していかなければならないと強く感じました。それが今回の助成を申請するきっかけになりました。

学校の先生と一緒に事後学習のプログラムを考えた



近江 正隆 氏
NPO法人 食の絆を育む会

とは思いましたが、大きな課題もありました。先生と考える以前に、先生自身も実体験が不足しているということです。そこで、まず、先生方に生徒がやっているものと同じような体験をしてもらおうと考え、昨年11月に芽室町で1泊2日の生活体験と体験を振り返りディスカッションをするというプログラムを組みました。ディスカッションでは農家にも入ってもらい、農家と先生でどういう役割分担ができるかということでも議論を深めました。また、この事業を活用して、今年2月に十勝管内を中心に高校の校長先生を含む32名が集まり、報告し、どうしたら体験を軸に子供に伝えるプログラムができるか、真剣に議論し、その中で、幾つか方向性が見えてきました。

子供たちが「食が大事!」「農業が大事!」という思いを持ち、生きる力を身につけるためには、農村での実体験である「農村ホームステイ」を入り口とした、振り返りながら学ぶ食育プログラムが必要です。そのためには、教員向けの体験プログラムを充実させるべきであるということです。

また、教育課程プログラムをこうあるべきだという形で作り上げるのではないということ。なぜなら、子供たちがいる環境はそれぞれ違い、子供たちへの伝え方は教員それぞれによって異なって当然です。したがって、子供たちに伝えるプログラムの開発ではなく、教員が自ら感じ、授業づくりに活かすことができる、教員対象の農村ホームステイがあった方がよいということに気づきました。これらを軸に、文部科学省の「今後の学校における食育の在り方に関する有識者会議」の11名いる委員の1人に私が選ばれた経緯があり、この発言をしました。

今後については、例えば既存生産者団体とも連携し、また行政とも連携して、教員に対する研修プログラム



振り返りディスカッション（農業者×教員）

をつくっていく、すなわち教員自ら食が大事、農業が大事という内発的な気づきから、それを子供たちに伝えていくためにはどうということが考えられるかということで、地域の農業者と連携していく体制をつくっていくことが必要ではないかと考えています。

寄り道で地域の魅力を短時間で体感

活動名：「ちょっと寄り道」で地域の魅力を知るイベントの開催

平成18年に「NPO法人東オホーツクシーニックバイウエイサポートセンター」を設立しました。

東オホーツクは、通過型の観光地が多い。まずは滞在時間を少しでも長く地域に割いてもらい、その中で地域の魅力を短時間でも味わってもらえるようなメニューを作って、評価してもらい、それをフィードバックして、スパイラルアップしていこうと考えました。

実施メニューとしては、地元の商工業者と連携して、そこでしか売っていない土地の旬のものを販売する「シーニック・マルシェ」を行っています。これをバルーンとして、そこに無料の電動アシストサイクル貸し出しコーナーを併設、マルシェ近郊の1時間以内で立ち寄れるような地域資源マップを配布。電動なので航続距離に制限があり、観光客も時間の制限がありますので、短時間で地域の魅力を感じられるような場所を地図にして渡し、回ってもらい、アンケートを行い、評価していきます。

マルシェは、東オホーツクの農商工業者の参加が平成19年度から24年度で1.3倍に増加し、利益は年々増えています。今年は網走市、斜里町ウトロ、清里町パパスランドさつつる、美幌町の4カ所で電動アシストサイクルコーナーの併設とともに行いました。

オホーツク地域は冷涼で、人口密度も低く、非常にクリーンなイメージがあるということで、自動車メーカーも電気自動車（EV=electric vehicle）の展開にいい地域ではないかと着目、オホーツクでEV車に乗ってもらうための基礎調査を「オホーツクEV推進協議



青木 伸仁 氏
東オホーツクシーニックバイウエイ連携会議

会^{*2}」でやっています。

アンケートでは、シーニックの認知度は、域外、域内を合わせると73%が「知っている」ということでしたが、オホーツクルートについては、域外の「知らない」は60%で、域外の人にはPRの強化が必要です。マルシェや電動アシストサイクルへの参加目的については、域内では、マルシェを目的とする人が68.6%を占め域内で浸透してきています。ただ、域外の人では「観光の途中で寄った」「観光目的地の周辺でちょっと興味があったので寄った」というのが50%。本来の目的であったマルシェをバルーンにして「ちょっと面白そうだから立ち寄ってみよう」というのが半分ぐらいあったということです。電動アシストサイクルは、域内に「快適」という意見が多く、立ち寄りのポイントコースは満足が46%で、少し低くなっています。より近い場所、景観の美しいところに5分ぐらいで行けるよう見直しが必要ではないかと感じています。シーニック・マルシェの満足度は66%と高くなっています。「リピートしたい」も域内が58.9%に対して域外は70%。「また来たい」という気持ちは域外が上回っています。オホーツクEVについては、回答が4名しかありませんでした。パネルだけでなく、チラシなどを配るといった方向でもPRを強化していくべきだと感じています。

今後の方向性としては、シーニックバイウエイの認知度は域内ではマルシェを通じてだいぶ上がってきていますが、なお推進していく、また域外へのPRを強化していこうということです。マルシェと電動アシストサイクルへの参加促進、リピーターの確保も、域外へのPRをもっと強化し、移動距離が短く、かつ面白いと思える体験ができるポイントを洗い直して、コースを再設定することです。オホーツクEVの認知度も、チラシなどを作りPRを強化していきたいと考えています。



※2 オホーツクEV推進協議会
オホーツク連携地域が目指す自然環境と観光が調和した新たな観光モデルの構築とそれによる地域振興を目指し、EVを利用した観光モデルの検討と実践を行うとともに、充電インフラ整備・運用に関する検討を行い、地域と協働しながら普及促進を図るため、平成22年12月、産官学により設立された。

科学があふれる街、科学の街「千歳」を目指して

活動名：科学の力で街おこし「サイエンスカフェin千歳」

私どもの取り組みは、サイエンスを使って街の活性化ができないかということがキーワードになっています。

千歳市の中心部に千歳タウンプラザという商業施設がありますが、郊外に大型店などができてしまった関係で、空き店舗、空きスペースが目立っています。ここで「サイエンス・カフェ」をやれば、人も来やすいし、施設内には商店が何店舗かあるので、そちらの客足が伸び、活性化ができるのではないかと考えて計画した事業です。

千歳市は、実は科学の芽があるところですよ。科学ボランティアがいろいろなスタイルで活動しています。

「科学の祭典」という日本全国でやっているイベントがありますが、千歳市では平成18年から始めて、毎年2,000～3,000人の集客があります。こういうふうに科学に触れ合う機会は千歳にはけっこう多いです。

それであれば、千歳市の中心市街地でたくさん人が集まるようなところでサイエンス・カフェをできれば、何か貢献できるのではないかと考えて、昨年1年間活動しました。

恵庭市の「えこりん村^{*3}」のエコロジー関係チームの方には、特定外来種のセイヨウオオマルハナバチの話をして、北海道区水産研究所の研究者には千歳市で研究をしているサケの放流に関する話をしてもらいました。近郊にあるノーザンホースパークの飼育担当者の方には、千歳は馬産地でもあるという側面から話をしてもらいました。それから中標津町の方から、千歳は空港のまちですので「不思議飛行機」という、よく飛ぶ紙飛行機の話や体験をしてもらったりしました。北大にいた火山学者の岡田弘先生には樽前山の話をしてもらいました。また、千歳にもクマが出ますので、猟友会がクマの防除活動をしています。そこで、どういう生育形態で、千歳には実際にどれくらい出るのかといった話をしてもらいました。



長谷川 誠 氏
サイエンス・カフェinちとせ
実行委員会

それから、ほかのイベントとの同時開催です。北都プロレスが興業をしたとき、「カホン^{*4}」という打楽器に関するサイエンス・カフェを同時に開催しました。ほかにも、千歳市で世界遺産への登録を目指している国史跡「キウス周堤墓群^{*5}」や、広く自然一般の支笏湖の楽しみ方の話をさせていただいたりして、普段タウンプラザという商業施設に来ないような人々に足を運んでもらい、まずはこういう施設があるということ、こういうところでイベントをしているということを知って楽しんでもらいました。

また、タウンプラザの立地している商店街と協力して、2月に行っている冬祭りに合わせてミニ版の科学の祭典を開催しました。サイエンス・カフェとはスタイルが違いますが、いろいろな実験を体験してもらいました。ブースがいろいろあり、液晶テレビの解体をしたり、はく製を見てもらったりしています。

1年間続けてきましたが、お店の人に聞くと、やっぱりそのときは売り上げは伸びる、普段来ない人に来ていただけるようになったということで、地域の活性化、中心市街地の活性化に少しは効果があったのではないかと考えています。

今の段階では、タウンプラザの所有会社と千歳市との契約の関係でサイエンス・カフェが止まっている状況になっています。うまく使えるようになれば、それなりの効果が出るように思えますので、できるだけ活用した形でできればと思っています。今回の活動をきっかけに、科学があふれるまち、科学を使ったまちおこしということで、賛同してくれる人が街なかに増えていけば、普通とは違った形のまちおこしにつながるのではないかと考えています。



ミニ科学の祭典



※5 キウス周堤墓群

約3200年前につくられた縄文時代最大の墓地の跡。キウスとはアイヌ語で草が多いところ。

※3 えこりん村

ハンバーグレストラン「びっくりドンキー」の㈱アレフが2006年に開園した。廃材を利用したガーデンや生ごみ処理機、地中熱ヒートポンプなど、花や動物たちと遊びながら環境問題について学べる施設。

※4 カホン (Cajón)

ペルー発祥の打楽器の一種。打面が木製である打楽器全般を指す。

津波に強い地域と強い人をつくる

活動名：釧路市における住民参加型の津波防災集会の実施



山口 義雄 氏
津波避難サポートプロジェクト

私たちの防災集会の特徴は、「津波に強い人をつくる」「地域をつくる手助けをする」ということで、地域づくり、まちづくりとつながっているとと思っています。地域の防災組織、町内会と連携し、小規模に町内会単位で集会をやって、住民対話型で知識と意識を高めていく。集会後は、フォローアップとして集会の報告を兼ねた「通信」の発行と関係者との情報交換を行っています。

これまで防災集会は、13回やってきています。今回の助成では11～13回目をやりました。

2月の釧路市の米町・弥生・浦見・知人町地区では参加者38人。冬の津波は、水が冷たく、しばしば流水を伴うこともあり避難が大変、避難所では寒さ対策も必要という話をしています。町内会の人たちと一緒にやってのグループワークでは、話し合った結果を発表して、討論、総括をして終わるという流れです。課題は、グループの中に消防団の人が入ると、専門家的な話の流れになってしまうということです。また、高台に住んでいる人は問題がないので、津波の影響を受ける地域に住んでいる人との意識の差が出てしまい、話がうまくかみ合わなかったりしました。

3月の釧路市の橋北西部地区では、参加者42人。「寒い時期に来る津波に備える」という講話を当プロジェ

クト代表の西村裕一がやり、グループワークは「津波に対する避難行動の確認」でした。ゼンリンのA3版の地図を9枚つなぎ合わせ、大きく1枚にして防災マップを作っています。

4月の白糠町漁業協同組合では、参加者21人。釧路市消防本部と一緒にやりました。ここでも「津波に備える」という講話を行いました。グループワークをやる時間がとれず、次回に町内会単位でやることにしました。

集会参加者には「津波に対する弱さについて」というシートを配って、ワークショップのネタにしています。シートの上部は「津波に対する意識と知識」、下部は「津波に対する弱さ」についての設問です。その場で丸をつけてもらい、それを基に話をしています。参加状況ですが、どう見ても60代、70代が中心ということです。

アンケートで新たに気づいたことをいろいろ書いてもらいましたが、地震・津波が夏に来るとは限らないので、冬の災害についての恐ろしさをとか、介護者の話は常に出てきます。避難のときは車なのか、歩きなのかという話も出ています。若い人の出席があればという当然な意見もありました。定期的に開いてほしいという話が多かったです。

今後の課題は、スタッフがなかなか集まらないので、少ないスタッフでも開催できるプログラム、現地の事前ヒアリングを簡単にする工夫、参加者、特に若い世代を集める工夫です。集会は土日に開催していますが、お母さん方が子供を連れて参加できるようになればいいと思いますので、工夫が必要だと思います。スタッフが少ないので、新たなスタッフの参入にも期待しています。当然ながら資金も必要です。

今後の展望としては、釧路市の防災関係者とのさらなる連携です。また、北海道で認定している地域防災マスターの方々を引っ張り込むということも考えています。集会を今までやってきたところだけではなく、新たに地域を開拓して開催していきたいと考えています。



グループワークの様子